

# 中国60年代と世界

第2期第11号(通巻第18号)2018.10.25

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告…(1) / 10月例会予稿 文革研究の視点再考『世界史の中の文化大革命』をめぐって…森瑞枝(3) / 寸評『世界史の中の文化大革命』…前田年昭(5) / 蔵出し批評:「一を分けて二となす」について…津村喬(6) / 譚蟬雪さんを追悼する…翰光(7) / 研究ノート:張成覚「反右派一大躍進一大飢饉」について(その2)…土屋昌明(8) / 蔵出し批評:雑説…西順藏 解題前田年昭(10) / 連載:胡傑監督『私が死んでも』字幕(その3)…土屋昌明編訳(13)

例会報告(8月23日)

## 今も低層であえがざるをえない無名の者、監獄からの声をき

8月例会(2018年8月23日)は「“極権”体制と闘い続ける—廖亦武氏について」と題して鳥本まさきが報告した。

報告者は現在、廖亦武が天安門事件で逮捕された人々に対するインタビューを集めた『子彈鴉片』を翻訳している。これは、英文・仏文版が2019年に出版されるのに合わせて日文化版も出版したいという考えである。本書は、「沈黙の大多数」にものを語らせた本である。廖亦武によれば、「沈黙の大多数」は本当に沈黙を望んでいるのではなく、むしろ、彼らのノドがいったん開けば、無駄話を垂れ流すエリートたちよりも、さらに大きくかつ強力な声を発し、それが大勢の声となる可能性も持っている。昆虫やアリにしても、生まれつき沈黙を望んでいるわけではない。廖亦武は、彼らのノドから声を出させる役割をこの本で果たしているのであり、それこそ彼が長年、一貫して取り組んできた仕事である。

廖亦武の基本的な態度をおさえたいうえで、これまでの仕事を紹介された。廖亦武は1980年代に現代詩を発表していた。八九六四に関する詩「大虐殺」を書いたために1990年3月、「反革命宣伝煽動罪」として4年間投獄された。出獄してから、獄友におそわった笛を吹いて酒場の流しをやり、糊口をしのいだ。そして、『中国底層訪談録』(邦訳あり、前田年昭による書評は本会報第2期第10号を参照のこと)『中国冤罪録』『中国陳情村』『地震狂人病院—四川5月12日大地震の事実の記録』など、大量の底層における小人物の現実を記録した作品を書いた。これらの本は中国国内では出版後にすぐに禁止されてしまった。

その後、中国国境を踏み越えて亡命し、現在はドイツ在住である。それからは、執筆だけでなく、自著の翻訳にも力を入れている。2013年には、獄中で書いた自伝『わたしの証言』の仏語版と英語版が相次いで世に出た。2016年秋、長篇小説『輪廻するアリ』の独語版が出ている。

『子彈鴉片』について、報告とフロアとの討論をまとめると、次のような特徴がみえてきた。本書は、今までの八九六四受難者を扱った本と異なる性格を備えている。たとえば、安田峰峻『八九六四—「天安門事件」は再び起きるか』(2018年5月、角川書店)も非常に興味深い内容となっているが、安田の本の特徴は、無名の学生からアメリカにいた中国留学生、香港の雨傘運動の学生、日本にいた中国留学生、そして学生リーダーなどへのインタビューから成り、一般人からリーダーへという縦軸と、中国からアメリカ・日本へという横軸、そして当時の世代から現代の世代へという時間軸で構成されている。ある意味、視野が広くて気が利いている。それに対して廖亦武の本の特徴は、無名の者、監獄、今も社会の低層であえがざるをえない因縁に拘っている。ある意味、視野が狭くて固着している。

ひとつ例をあげれば、廖亦武は2005年ころに出会った武文建という「六四暴徒」のことを書いている。廖亦武に会った武文建は、非常に憤ってこう言ったという。「歴史はあんたたちエリートによって支配されている」と。「軍の車を阻止した俺たち、百万にも及ぶ北京市民、こうした人たちが「六四大虐殺」の主体のはずだ」と。廖亦武は、彼の罵倒を受けて、自分がそれまで「六四」のいわゆる「暴徒」

たちに全く関心を持ってこなかったことに気づかされた。監獄における屈辱と苦難の中に浸っている自分に気がついた。そして、武文建へのインタビューからこの本は始まるのであり、武文建のナビゲートのもと、「六四暴徒」へのインタビューが続くのである。

彼らが忘れ去られたのは、「六四」で共産党が銃弾を使って彼らを地獄に落としたからであり、その

〔(4) ページからのつづき〕

るが、さらに進んで、世界史の上で文革を考える視点を

後、鄧小平の南巡講話以後、アヘンの煙を使って人々に麻酔をかけたからである。しかも、これほど長いあいだ、麻酔は続いている。中国人だけでなく、私たち中国の外にいる人たちも。だからこの本は『子彈鴉片』というのである。

例会では、「六四」二十三周年（2012年）にNHKが放送した廖亦武に関するドキュメンタリーも鑑賞したことを付言しておく。（編集部T）

どう立てたらよいかが問われているのである。

（もり・みずえ、学芸家）

### 今後の研究会予定

12月27日（木）午後6時～8時（冬期休暇のため時間が早めです）

土屋昌明「中国亡命文化論の提唱」、会場：専修大学神田校舎社会科学研究所

〔(6) ページからのつづき〕

ているのではなく、無数の矛盾と重層的に媒介しあって存在します。その中で、矛盾は一定の条件（他の矛盾との一定の関係）を、つまり形態を与えられたとき、はじめて自己を全面的に展開することができます。矛盾が自分を展開し切って消滅することができます。「解決」ですから、人間主体は勝手に矛盾を「解決」するわけにはいきません。しかしこの矛盾の対立する二つの側面とその条件を認識すれば、主体はこの矛盾に形態を与えることができ、「矛盾の闘争と転化を促す」ことができます。これが矛盾の「処理」です(4)。

《「一は分れて二になる」を実践する》の中で、まず自分の工作を「一分為二」し、次に情勢や、そのさまざまな要素（組織や、「他人」の工作）を「一分為二」し、最後に自分自身のあり方を「一分為二」する、という構成がとられているのは、深い意味があると思います。これは「一分為二」にもとづいた自己認識としての理性認識が、抽象から具体へ、個々人の能動的実践から、革命的階級主体形成へと深まっていく過程ではないでしょうか。そしてこれこそが、具体的実践が真にマルクス・レーニン主義の普遍的真理とむすびついていく過程ではないでしょうか。

日本の運動は新しい段階にはいりながら、自分の形態を見つけられずに、自然発生的なものにとどまっています。今こそ、闘っている大衆ひとりひとりが自分で自分の工作を点検し、自分の頭で情勢をつかみ、自分を日本のプロレタリアートの階級形成の

大河の中に位置づけてみることに、つまり「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と日本の具体的実践とむすびつけること」が要求されてもい、可能にもなっています。「一を分けて二となす」は日本革命を「処理する」ための、ひとつの普遍的方法といえましょう。

〔註〕

- (1) 周揚は前中央宣伝部長で、六〇年代中国におけるテルミドールのイデオロギー的立役者の一人である。六六年六月解任。
- (2) 「合二而一」は「二を合して一となす」こと。中共高級党学校校長だった哲学者楊獻珍は「合二而一」というふるめかしいヘーゲル主義の命題を「唯物弁証法」の根本原理として主張したが、それはもちろん、日本で日共のイデオログや三浦つとむといった低俗な連中が説きまわっている矛盾調和論・階級調和論と同じ政治意図と結びついたものだった。毛沢東は六三～四年に「一分為二」か「合二而一」かという論争を広汎な大衆を動員しておしすすめ、ヘーゲル主義とその全体知にたいする超＝哲学（「思想方法」）的批判を大衆運動として組織し、「哲学活用」（情報の実践的相対化のスタイルと実践）の習慣をひろく確立した。
- (3) 「事態の概念とは、事態の概念的把握のことであり、事態の概念的把握とは、事態の構造を知ることである。認識活動の本来の性格とは、一者の二分である。弁証法は、外から、あるいはあとから、認識活動に付加されるのではない。それはまた、認識活動の諸性質のひとつなのではなく、認識活動が、それらの諸形態のひとつにおける弁証法そのものなのである。すなわち、認識活動は一者の二分である。《概念》と《表象》は、弁証法的思考においては、事態の構造を精神的に再生産するための、すなわち事態を概念的に把握するための、一者を分割する方法という意義をもつ。」（カレル・コシーク《具体性の弁証法》）
- (4) ここから革命論における二つの傾向について語っておくこともできる。一方に社会的内的矛盾を認めず、「異質の矛盾は異質の方法によってしか解決されない」（毛沢東）こと、つまり人間は自分自身をしか解放しないことを認めない「左翼」主観主義的行動主義があり、他方に革命形態の問題——マルクスとエンゲルスが「交通形態そのものの生産としてのコミニズム」について語ったにもかかわらず——を一切無視して資本主義の自動崩壊を待機する右翼的経済主義があるのである。

〔出典：『魂にふれる革命』ライン出版、1970年6月、pp.131-136、転載にあたって前文は省略した〕

10月例会（2018年10月25日）報告予稿

## 文革研究の視点再考 『世界史の中の文化大革命』をめぐって

森瑞枝

例会では、馬場公彦氏の新著『世界史の中の文化大革命』（平凡社新書）を材料にし、文革研究の視点について考え直したい。

本書は、端的に言って文化大革命全否定の書である。本書によれば文革は、毛沢東の妄想によってひきおこされたもので、社会を権力者が操った状況だった。本書でいう「文革の亡霊」とは、個人崇拜を軸にして出された比喩とうけとれる。まず感じるのは、本書での文革観は、中国共産党の公式見解と同一平面で語られていることだ。とくに序章「文革五〇年目の亡霊」にはその感を強くする。「文革は破壊的な惨劇だった、今なおその傷跡は癒えていない、虫の眼と鳥の眼から文革の真実と徘徊する革命の亡霊に迫りたい」という。1981年に「歴史決議」が採択され、毛沢東が引き起こした「極左路線の重大な誤り」「党と国家と人民は建国以来最大の挫折と損失を蒙った」とされた。この歴史決議は、文革は毛沢東と江青四人組、一部の左派（正体不明）のやらかしたことで、中国共産党も、他のみんなも被害者、という形でフタして落着かせたものであろう。つまり、毛沢東と中国共産党とは別ものだとしている。これは、日本軍国主義が悪で、日本人民は被害者と同じ論法だ。「歴史決議」の問題性について本書がまったく検討の対象としていないのは、本書では文革は76年で終わっているので、本書の課題からはずれるのであろう。この点については、なぜ1981年に採択がおこなわれたのか、胡耀邦による反右派および文革の冤罪の名誉回復が、ある程度決着した段階が1981年だという点を考慮する必要がある。その上で、文革を考える上で、76年で文革は終わったから検討の範囲も76年までとするのではなく、少なくとも名誉回復と文革否定までを文革を考える検討の範囲に入れるべきだと私は考える。

そのうえで、88年に文革題材の作品の公的発表を厳しく制限する通達が出されたことも検討すべき課題とした方がよいと思う。このときにこそ、銭理群が「記憶の忘却」「忘却の強要」であるとして、「忘却を拒絶しよう」と呼びかけているのであって、銭氏は忘却することが被害の忘却ばかりでなく、加害の忘却も招いてしまうこと

を恐れているのだ。この点を考慮せずに銭理群の意見を参照することは、歴史に対する銭氏の深い反省の態度をないがしろにする危険があるのではないか。

本書によれば、「公式の場で文革の語りを禁じる」ということは、文革に対する再評価の兆しを封じ込めておけば、災厄の再演は回避されるだろうという知恵でもある」という。つまり、文革当事者たちが文革を忘却し、新世代が文革について知らないことによって、文革というものが存在しなくなるから、その災厄の再来も避けられる、という考え方である。ここでいう文革再評価とは、具体的に何を意味するのだろうか。再評価することと「災厄の再演」との関係が前提されているが、再評価すると再演されるのだろうか。文革は、封じ込めないと湧き上がるものなのか。湧き上がると「災厄」になるというのはなぜか。これは、上が下に暴力でやられるということを「災厄」といっているように読める。上が下に暴力でやられることは「災厄」なのだろうか。上にダメなやつがすすわっているとしたり、それを排除することは「災厄」なのだろうか。これは本書の立場の問題になりかねない。中国共産党にとって文革は、造反有理と反抗され、奪権された文字通り「災厄」である。文革の再評価のうちには、一次的ではあれ中共からの奪権の成功体験をとりあげることになるので、危険と見たわけで、だから中共は文革経験を封殺したかったという点を考えておかなければならない。文革を、共産党の看板であるところの「革命」とは断じて呼ばせたくなかったのだ。中共に文革という革命は存在しない。私たちは、この立場にすると乗ってはいけない。それとも「災厄」とは、みんなが攻撃し合ったことをいうのか、個人崇拜の集団的催眠的暴力のことか。文革を語るときに、このあたりの立場の問題を抜きにすることはできないだろう。

また、本書で参照されている銭理群の意見は、もっと深くとらえる必要がある。彼が拒否する忘却とは、自分たちの記憶のことである。悪夢も挫折も丸ごとの歴史を引き受けようとしている。都合の悪いことは忘れるのが大勢の幸せ、という考えを否定するのであり、そのような考えは権力の余計なお世話だと拒むのが彼の姿勢

なのだ。

本書によれば、「多大な犠牲をもたらし、加害者と被害者が今も隣り合って暮らしている社会で、犠牲の真相究明への道が塞がれ、加害者の謝罪と被害者への補償がなされないとすると、集団としての記憶は形成されないだろう。傷跡が癒されない鬱積した怨念と化して、いつまた「亡霊」のように現れてくるかもしれない」とある。ここでは、文革に加害者と被害者が前提されており、「亡霊」は犠牲者・被害者の怨念のことを言っているようである。しかし、隣同士・家族同士の次元で、ほとんど加害者と被害者が分けられないのが文革だったのではなからうか。

なぜ「強要された集団忘却のさなかにありながら、文革が再演されるかのような動きが、最近の中国で起こっている」ということになるのか。「文革が再演されるかのような動き」という句は、ジャーナリズムでよく使われているが、現実のどんな動きについてその句を使っているかで、使用者みずからの文革認識をあらわにしている。薄熙来が紅歌を歌わせ、毛沢東の名のもとに集団を動員したことは、どのような意味で文革の再演と言えるのか。習近平が政敵を「腐敗」という口実で次々に倒しているのは、どのような意味で文革の再演と言えるのか。こうした「再演」の再演たるゆえんを説明しようとするれば、あたかも自己分析のような、主観的な文革イメージの解説になってしまうのではなからうか。「標的となる敵を公衆の面前に晒して、民衆動員と個人崇拜によって既成権力の打倒を図る」という手法と目的は、かつての文革を彷彿とさせる。文革の亡霊がまだ消えずに徘徊しているかのようだ。文革の亡霊とは一体なんだろうか。

上で指摘したように、本書で「文革の亡霊」は、文革の犠牲者・被害者の気持ちがある後も抑圧されて怨念となっていることを指している。だとすると、「標的となる敵を公衆の面前に晒して、民衆動員と個人崇拜によって既成権力の打倒を図る」という手法と目的」がなぜ「文革の亡霊」と関連するのか、説明がほしいところだ。

「文革の亡霊」という言い方は、本書のみならず、多くのジャーナリズムで使われているから、本書はそれを流用しているにすぎないのだろう。しかし、こうした曖昧な概念で 50 年前と現在を結びつけて考えようとするのは、「歴史は繰り返す」という俗流解釈と大差ない。自己分析するならば、「文革の亡霊」という言い方によって、逆に隠されてしまうものを考える必要がある。

文革とは共産党に対する転覆・革命でもあったという

点を考えなければならない。それを本書は、知識人に対するイジメや下克上と前提しているように感じられる。それを前提にして、文革と世界史の関連を論じるとすれば、どうなってしまうのか。日本における文革の影響は、「革命の狂信が憑依し、東の間のユーフォリアのあと、ユートピアの夢は一挙に醒めて、ディストピアの現実につきもどされる。社会はカタストロフの惨劇がもたらすトラウマにさいなまれるのである」ということになる。文革という「狂信」、中国人の集団ヒステリーが、シャーマニズムのように「憑依」し、それが日本の学生運動となった、ということなのだろうか。「亡霊」は「社会集団に憑依して制御不能に陥れる。そして混乱と無秩序と破壊をもたらす」のだから。

本書によれば、文革の世界史への道筋はインドネシアにある。毛沢東が仕掛けたインドネシア共産化、その挫折が文革前史となる。中国共産党の国際的威信は、9.30 の失敗で頓挫した。それが毛沢東自身の中共内における落ち目と反応して、プライド挽回をかけて爆発したのが文革だ、と読めそうである。この論理は、インドネシア 9.30 の黒幕は中国だという説に乗らなければ成り立たない。いちおう「事件の計画と実行に直接関与したとまでは言えない」と慎重さもあるが、「両者の間に深い影響関係があったことは否めないのである」と述べている。しかし、これはスハルト政府の論法の丸呑みになりかねない。煮え切らないスカルノに痺れを切らした毛沢東が、共産化を仕掛けたが失敗し、その結果、漁夫の利を得たスハルトと CIA にスカルノも潰され、インドネシアの共産化を潰された、という筋書きとなってしまう。

本書でインドネシアの問題が大きくとりあげられているのは、「文革を中国一国内の悲劇として完結させたくない。現代中国研究者の専有物のままにしておきたくない。世界史の大舞台に引きずりだして、国際的要因と国際的影響に注目した新しい語りに乗せてみたい」からであろう。国際情勢が文革の動機でもあるという点を考えようとするのは評価できる。数年前、ジョシュア・オッペンハイマー監督の『アクト・オブ・キリング』ではじめて 9.30 事件の殺人の実情を認識したとき、この事件と紅衛兵の暴力とが白と黒の反転したもののように感じられ、文革の動機に 9.30 の反作用の力を見いだしたい気持ちになった。しかし、それを検討するためには、両者の異なる側面から目をそらすことはできないだろう。インドネシアと中国の関係はもちろん考察すべきではあ

〔(2) ページ中段につづく〕

例会への紙上参加

## 寸評『世界史の中の文化大革命』

前田年昭

歴史とは現在への認識である。歴史記述には記述者の現在の立場、現状認識が露呈する。

「一国史型文革観に対して、本書は文革の国際的要因と越境性を重視したもう一つの見方を提示し、文革のもう一つの真実に迫りたい」(pp.15-16)と風呂敷を揚げた平凡社新書新刊『世界史の中の文化大革命』は、インドネシアの9・30事件で「中国は四面楚歌となって孤立した」(p.69)と断じ、文化大革命を「皇帝の座をおろされた毛沢東が、再び玉座を奪還しようとした、宮廷内クーデター」(p.277)、「(毛沢東は)民衆の熱狂と林彪の知謀を受けて自力で革命の祭壇に這いあがった」(p.101)と記述する。著者・馬場公彦の拠るところは、毛沢東の死後、文革を全面否定した中国共産党の「建国以来の党の若干の歴史問題についての決議」(1981年)である。文革の全面否定以後、中国社会は社会主義から資本主義に変色し、労働者農民は絶対的貧困化に呻吟している。2015年、貴州省畢節市で4兄妹が自殺した際、13歳の子をして「死ぬことは長い間の夢でした」との遺書を遺さしめた事件が象徴している。現在の中国社会は、「人が人を食う」常闇の地獄以外の何ものでもない。

人民の怒りに怯える中国の党は、文革評価の手直しにとりかかった。今年、党中央教育部傘下の人民教育出版社が出した中学校2年生用歴史教科書下巻の改訂版がそれだ。文化大革命は毛沢東の“錯誤”であったという表現は、毛沢東の“苦労と探索”という表現に書き改められ、文化大革命は「十年の大災難(浩劫)」から「十年の艱難辛苦の探索と建設成就」に言い換えられた。「20世紀60年代に毛沢東は、党中央が修正主義に走り、党と国家が資本主義の復活という危機に直面しているとの誤った認識を持っていた」との記述が、改訂版で「誤った」が削られた。

著者・馬場公彦が中国共産党の「歴史決議」の尻馬に乗って文革を全面否定したとき、現実には「決議」路線の破綻を証明し続け、中国の党と政府はついに「決議」を誤りと認めざるを得なくなってきたのである。権力におもねって「決議」を墨守する著者・馬場公彦にとって何と皮肉なことか。

「喜劇」は、本書のなかで中国語の誤植として最も端的に馬脚をあらわしている。

「一分二為」(p.130)は、「一分為二」の誤りである。「一

分為二(一を分けて二となす)」は、毛沢東の哲学の核心であり、誤植は単なる誤植ではない。著者の一知半解と浅薄な歴史観の露呈に他ならない。

著者はこれを、文化大革命の際、「造反有理」と並んで毛沢東が好んで使った言葉として挙げ、近藤邦康を援用して次のように書く。

この「乱・治」「破・立」「反・理」といった二律背反論の根底には、[中略]「矛盾論」の闘争哲学があった。すべてのものは生成変化している。変化のなかで、二つの対立する要素が顕在化する。その矛盾が相克するなかで、闘争によって敵の本性がさらけ出される。その敵を徹底的に叩く。それまで劣勢だった側が優勢だった側を打倒し、逆転させて起死回生の勝利をもたらす。その結果、統一が生まれ、世界の共産主義が実現する。これが「矛盾統一法則」である。中国革命、抗日戦争、国共内戦など、この矛盾論に基づいて勝利を獲得してきた。(p.130)

おわかりだろうか、この歴史観のいかに凡庸であるかを。被支配と支配が入れかわり驕れる者は久しからず、というわけだ。「その結果、統一が生まれ」というが、それでは毛沢東の「一分為二」の対極として批判された「合二而一(二つが合して一つになる)」に他ならない。著者のいう劣勢と優勢には階級対立への認識がなく、結果、階級協調を説くのみである。興りつつある階級が滅びゆく階級を食い尽くす——これが「一分為二」であり、社会発展史の弁証法的な法則である。ここに変革のための人民の哲学がある。真逆の立場で、権力におもねる著者の立場からは、「一分為二」が「造反有理」と一体であることは理解できず、造反と有理が二律背反だなどと頓珍漢を言うのみである。ここに誤植の真因がある。

歴史は人民が創造する。問われているのは、著者の立場なのである。「ヨーロッパに一匹の妖怪が徘徊している。 Kommunismus という妖怪が。」と『共産党宣言』は書き始めた。妖怪とは、ブルジョアジーが怯える「パリ・コミューンの亡霊」であった。中国の党と政権、そして著者は文革の「亡霊」に怯え続けるがよい。

(まえだ・としあき、編集組版者)

歳出し批評

## 「一を分けて二となす」について

津村喬

三五号の《「一は分れて二になる」を實踐する》は、文化大革命の決定的勝利の情下で、中国人民の具体的な闘争の中でどれほどマルクス主義の哲学が生き生きと運用されているかを伝える、とてもよい資料と思います。「一分為二」の観点は、ぼくらが日本の具体的実践の中ですぐさま活用できる、普遍的な実践性をもった分析方法です。

ただ、これまでの定訳として山下竜三先生も採っておられる「一が分れて二になる」という訳語は、さまざまな誤解を生むこととなるのではないのでしょうか。訳注も本文もはっきり述べているように、「一分為二」は事物の二つの側面をとらえるものの方であり、「弁証法的分析」の方法であって、かつて周揚 (1) が《哲学社会科学工作者の戦闘的任務》で述べたような、どんな運動も組織も二つに分裂するといったバカげた運動論ではないのです。

「一が分かれて二になる」という訳語は、そのもとの責任は文革前の中国の一部の誤った論調にあるのでしょうか、それが分裂主義の合理化であるという誤解を生んで来ました。

これを「一が分かれて二になる」という分析方法だととらえた一部の論者は、「一分為二」も「合二而一」(2) も結局同じことで、その対立は哲学的なものというより政治主義的なものだと主張しました。なぜなら、そのようにとらえられた「一分為二」と「合二而一」はどちらも、概念の自己運動の形式ということになり、ヘーゲル主義的などちらでもよい解釈の問題になってしまうからです。

「一分為二」がレーニンの《弁証法の問題によせて》に一定の根拠をもっていることに注目した人々は、その記述に従ってこう主張しました。「統一物の二つのものへの分裂とその二つの側面の認識は弁証法の核心である」つまり客観的事物は必ず「二になる」、それを認識することが問題である。「一分為

二」は存在論と認識論の弁証法における統一を示している——「分」というのは「分かれる」ことでも「分ける」ことでもあるというのです。確かに両方の意味は成り立ちます。しかし、自動詞と他動詞との二つの側面から成る「分」において、この条件のもとでどちらが主要な側面か、ぼくは「分ける」、認識するほうだと思います。「分かれる」ことが主要な側面だとしたら、そのような客体の自己運動を認識は単に反映するだけで、とだいに「一分為二」を「實踐する」ことなどでははしないではありませんか。

ぼくは「一分為二」は、竹内実さんが《中国・同時代の知識人》でしたように「一を分けて二となす」と訳するのが、より適当と思います。

《実践論》のうえにはじめて《矛盾論》が成り立つこと、毛沢東にあっては、主体の弁証法のうえに対象の弁証法が成り立つことを重視する必要があると思います。レーニンは相対論と対決する中で、特に対象の弁証法を強調し、その唯物論的反映を説きました。それはマルクスに見られる、また毛沢東が体系化した実践的唯物論から後退した、フォイエルバッハ的機械論を含んでいます。毛沢東の「一分為二」という「高度の抽象」は《弁証法の問題によせて》よりもむしろ、マルクスが《聖家族》の中で、ブルジョアとプロレタリアを、認識の力によってとりだして来る方法にひとつの深い根拠をもっているとぼくは思います。いうまでもなくこれは、マルクスやレーニンが実践の中でたえず運用していた弁証法の方法にほかなりません。

つまり「一を分けて二となす」とは、人間が認識の力によって客観的な矛盾に、能動的に対処して、事物を変革していく方法のことです(3)。客観的な矛盾はいうまでもなく内部の原因によって運動します。しかしその矛盾は「それ自体で」真空の中に存在し

〔(2) ページ下段につづく〕

## 譚蟬雪さんを追悼する

翰光

私が譚蟬雪さんと出会ったのは、2014年に香港で行われた独立（independent）映画祭の席上でした。その映画祭では、3本の映画が上映されることになっていました。私が監督した『亡命』の他に、胡傑監督の新作『星火』と呉文光監督の作品でした。高齢だった譚さんを大陸からわざわざ迎えたので、映画祭の主催者側も観客も大喜びだったことを覚えています。

私も初めて譚さんと会い、第一印象は、とても人にやさしい、親しみやすい方という感じでした。その上、大陸でよく言う「架子」というようなもの（偉ぶった感じ）は一切なくて、低姿勢であったこと、そして頭の回転が速いことが脳裏に残りました。とても貴重な歴史上の老人だと思い、いつかゆっくり、彼女の家に訪問して話を聴こうと、ずっと思っていました。その後、新作の制作に忙しくて、なかなか夢が実現できなかったのです。

確か2年たって、2016年の夏に彼女が同居していた娘の家に訪問して会いました。温かく迎えてくださいました。そして色々昔の話とか、現在の社会に対する見方とかを語ってくれました。とても元気だったので、このままでは後10年、20年も生きられて、多くの証言を社会や歴史に残してくれるだろうと思いました。別れる時、彼女から依頼の一つを受けました。「もっと本を書きたいので、できれば録音ペンがほしい」というのです。私はそれに応じて、日本で超小型のICレコーダーを買って、次回中国に行くときに手渡そうと思いました。

その年の末か、彼女が海外の反体制の人たちが

作った賞をもらったという情報を受けました。そのほかに奇談や伝説もありました。一説は、彼女はとても頭が良いので、政府が海外の賞を取らないように、ある部門がお金を提示し、彼女はそのお金を受けたし、海外の賞金も受け取ったというわさでした。私は、彼女が政府をこけにしたのかと思って、本当だとしたら偉いと思いました。

その後、私も忙しくて、すぐ彼女のところへ行けませんでした。去年の初め、2017年4月に上海に行く機会があり、彼女に電話して、ICレコーダーを彼女の家に持っていこうとしました。上海について電話すると、彼女は「もういません。今、毎日監視されて、それを届けるあなたの方が危ないし、それを受けたら、更に監視が厳しくなる」と悲鳴をあげていました。それはそうでしょう。年配だから娘さんのところに同居しているのであり、警察のパトカーが頻繁に来ると、娘一家に迷惑がかかる。声が緊張して高くなっていました。

私は、その後、彼女が一刻も早くその監視から解放されることを祈りつつ、再会を夢見ていたのですが、突然、ご訃報が届いてしまって、頭が真っ白となってしまい、悲しみにうち沈みました。ご冥福をお祈りいたします。彼女のご逝去は、中国人、そして次世代の歴史にたいへん不幸なことであります。それによって、大事な歴史を失ってしまうこととなります。本当に大きな損失だと思えます。譚さん、お疲れさま、あの世で安らかに過ごせるよう、お祈りいたします。

\* 譚蟬雪さんは2018年6月1日に上海で逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。（編集部）

研究ノート

## 張成覚「反右派—大躍進—大飢饉」について(その2)

土屋昌明

\* 本稿は、2018年3月31日におこなわれた張成覚氏の講演原稿(中国語)の摘要である。前号で四の①②を載せたが③は省略し、今号は④からとする。

## ④中央統戦部座談会

章伯鈞は1957年5月21日にこう述べている。「いま工業の方では設計院がたくさんあるが、政治には設計院が一つもない。政治協商会議・人民代表大会・民主党派・人民団体は、政治における四つの設計院であり、これらの設計院の作用をもっと發揮させるべきだと私は思う。政治的な基本建設は、まずこれらと討論するのがよい。三人集まれば文殊の知恵というではないか」。

羅隆基は5月22日に、政治協商会議・人民代表大会で委員会を作り、「三反」「五反」「肅反」運動における行き違いを検査すべきだと提案した。さらに、わだかまりがあれば申し出るように奨励した。この委員会は共産党以外に民主党派や各方面の人士も含まれていた。

儲安平は6月1日に、どんな単位でも指導者に一人は黨員を入れるべしという指導に意見を提出し、これは「党の天下」「セクト主義現象の根源であり、党と党外の矛盾の基本的な原因だ」とした(「向毛主席周總理提些意見」)。

これらいわゆる右派言論は、毛沢東も言ったことがあるが、毛沢東にしか発言権がないものだった。

政治設計院について毛沢東は、党中央だけが設計院であった。しかも章伯鈞の意見では、設計院は諮問機関であって決定機関ではありえなかった。

羅隆基のいうような「平反委員会」について、毛沢東はすでに2月27日の講話で、57年と58年で肅反運動について検査して総括すると具体的に述べている。基本的に羅隆基の考えと違いはなかったはずだ。

毛沢東は57年10月10日に次のようにこれら右派言論を非難している。「帝國主義、蔣介石は右派

と氣脈が通じている。台湾や香港の反動派は、儲安平の「党天下」・章伯鈞の「政治設計院」・羅隆基の「平反委員会」を擁護している」。

## 五、「六・八号令」—『人民日報』社説「これはなぜか？」

毛沢東は匿名の手紙をとりあげることから反撃を開始した。この匿名の手紙を受け取ったのは盧郁文(1900～1968)で、ときに國務院秘書長助理だった。彼は大学教授出身で、イギリス留学のあと、国共和談の際に国民党代表団秘書長、破談後に北平に残った。鳴放のとき中共を批判する言論に反対したため、北京大学の学生が彼に手紙を書いた。毛沢東がこの手紙をとりあげたのは、盧郁文が中共人士ではなかったことと、若い学生が手紙を書いたからである。盧郁文はのちに國務院副秘書長まで至ったが、その子は右派にされた。

同じ日に毛沢東は「力を結集して右派分子の氣違いじみた攻撃に反撃をくわえよう」という指示を出した(『毛沢東選集』第五卷)。その指示で次のように述べている。「各民主政党的なかの反動分子の氣違いじみた攻撃に注意してもらいたい。各党にそれぞれ座談会をひらかせ、左派、中間派、右派の人びとをみな出席させて、正反両面の意見を残らずさらけ出させ、記者にそれを報道させる。われわれは、左派、中間派の人びとにうまく働きかけて、右派に対する反撃の発言をさせる。こうすれば、なかなか効果がある。党の機関紙はすべて文章を数十篇用意しておき、その地における反動分子の攻撃が山を越したところに、つきつきと発表する。中間派と左派に文章を書かせるよう心がける。しかし、そうした攻撃が山を越すまでは、党の機関紙にまともな文章をあまり載せないようにする(中間派の文章はいくらか載せてもよい)。大字報は、かならず、大衆に反駁させなければならない。大学では、教授の座談会をひらいて、党への意見を出させ、できるだけ右派

に毒素を吐かせて、それを新聞に発表する。かれらに学生の前で演説をさせ、学生に自由に意思表示をさせたらよい。反動的な教授、講師、助手、学生に毒素を大いに吐かせ、言いたいことを存分に言わせるのがいちばんよい。かれらは、いちばんよい教訓なのである。「要するに、これは一大合戦であり(戦場は党内にもあれば党外にもある)、この戦いに勝たなければ、社会主義はきずきあげられず、そのうえ、「ハンガリー事件」のおこる危険性もいくらある。いま、われわれが積極的にすすめている整風は、おこりうる「ハンガリー事件」を積極的に誘いだし、それを分割して、各機関、各学校で演習をやらせ、処理をさせ、多くの小型「ハンガリー事件」に分割してしまうことである。このようにしても、党と政府の小部分がつぶれるだけで(この部分がつぶれるのは、まことにけっこうなこと、これでウミが出るのである)、党と政府は基本的につぶれることがなく、利点はきわめて大きい。これは避けられないことである。社会に反動派が存在していて、中間分子もいまのような教訓をくみとっていなかったし、党もいまのような鍛錬をうけてはいなかったのだから、騒ぎはどのみちおこるはずであった」。

## 六、七一社論「陽謀」

反右の開始から三週間後、毛沢東は『人民日報』に再び「文匯報のブルジョア階級の方向は批判されるべきだ」という社論を書いた。そのなかで「春のあいだ、中国の天空上には突然、黒い雲が乱れおこったが、その端緒は章羅同盟に出ている」という。「章羅同盟」とは、章伯鈞と羅隆基および民主同盟のことである。しかし当時、民主同盟内部で実権を握っていたのは楊明軒・楚図南・胡愈之などの中共秘密党员だった。それでちに「同盟」を除いて「章羅聯盟」と変えて、章伯鈞と羅隆基に責任を負わせた。いずれにせよ、千家駒が言うように「千古の奇冤(大冤罪)」であることに変わりはない。社論は得意げにこう述べている。「本紙(文匯報)をはじめ党のすべての機関紙は、5月8日から6月7日までのあいだ、中国共産党中央の指示にもとづいて、ほかでもなくそのようにしたのである。その目的は、魑魅魍魎や妖怪変化のたぐいに「大鳴大放」をやらせ、

おもいきり毒草を伸び放題にさせておき、それを見た人民が、世界にはまだこんなしろものがあつたのかと大いにおどろき、これらの悪党を退治するため立ちあがるようにするという点にあつた。つまり、共産党は、ブルジョア階級とプロレタリア階級とのこのたびの階級闘争は避けられないものであると見てとつた。そこでブルジョア階級とブルジョア知識分子にこのたびの戦争をおこさせておいて、新聞はある期間、正しい意見を載せないか、すこししか載せず、ブルジョア反動右派の気違いじみた攻撃に反撃をくわえず、また、整風をおこなっているすべての機関・学校の党組織も、ある期間、こういう気違いじみた攻撃にっさい反撃をくわえず、どの人の批判が善意のもので、どの人のいわゆる批判が悪意のものであるかを大衆にはっきり見てとらせ、こうして、力を結集し、機が熟するのを待って、反撃に出たのである。ある人はこれを陰謀だというが、われわれはこれを陽謀だという。それというのも、妖怪変化はとび出させてこそ退治でき、毒草は芽を出させてこそ摘みとれるということ、これはあらかじめ敵に告げてあつたからである」。これについて李慎之はこう言っている、「最もフラットにみて、陰謀にせよ陽謀にせよ、「予謀」(事前に用意していた企み)であり、「蓄謀」(じっくりと考えてあつた企み)であるには変わりない」。

## 七、大躍進と文革の伏線

毛沢東は「革命の促進派になろう」(57年10月9日)でこう述べている。「第六点、プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾、社会主義の道と資本主義の道との矛盾、これは疑いもなく、当面のわが国社会の主要な矛盾である」。その後、58年1月の南寧会議で毛沢東は周恩来を面罵し、こう言っている。「急進はマルクス主義のものであり、反急進は非マルクス主義のものだ。急進に反対すると六億人民は気を削がれるのだから、方針として誤りであり、政治問題である。急進反対は右派から50メートルしか離れていない。今後は急進反対のスローガンを二度と出してはだめだ」。1ヶ月後、中共中央政治局拡大会議(2月18日)で毛沢東はこう述べている。「急進反対の人は、1956年を急進だと言い、

右派は 1956 年を「全面的急進だ」として攻撃する。「右派はきみたち（周恩来・陳雲）を一蹴し、きみたちと右派の距離は 50 メートルくらいしかない」。右派というレッテルを目の前にして、周恩来すら冬の蟬のように口をつぐんだ。これ以降、党内で真実を語る人はいなくなった（彭徳懐が唯一だった）。かくして毛沢東は三面紅旗（総路線、大躍進、人民公社）を指揮することができるようになった。

### 大躍進は大飢饉をもたらした

大躍進は客観的な可能性を無視した高速をめざした。できあがった鉄鋼は粗悪で、使い物にならなかった。しかし、それだけの労働力は使ったので、農村では収穫をすることができなかった。人民公社はもとあった高級合作社を併合したもので、公有の度合いがより高かった。「政社合一」は全国の農村を軍営にした。59 年から 61 年の飢饉で、餓死者は 3750—4500 万人とされている。なかに右派の死者も少なくない。右派を収容した夾辺溝労働農場では、死亡率は 70% に及んだ。しかし全国的に見たら、死者の絶対多数は、毛沢東が革命のときに頼りにした農民たちであった。餓死者が特に多かった河南の信陽は、もともと農業経済が発達し、物産も豊かで、魚米の里といわれていたのに、大量の餓死者が出たことで有名になってしまった。「(周恩来が派遣した) 十数人の調査隊が信陽に到着すると、多くの村がすでに無人となっていたり、人が相食んだりする惨状を目撃することとなった。光山という県では、餓死

者が 20 万人も出ていた。調査に来た者たちは涙無しではいられなかった」(『中華人民共和国史 (1949—1981)』香港中文大学出版社、612 頁)。

このような惨劇を毛沢東も知らなかったはずはない。「私たちは、劉少奇が湖南の農村調査のときに毛沢東に出した手紙を発見した。そこには、湖南の農民の住居は 40% が毀されていると書いてある。これは恐ろしいことだ。また、1959 年 3 月 25 日に毛沢東はある党内会議の席でこう述べた。「食糧の買い取りを三分の一にしても、農民は造反しないだろう。餓死者が半分出たとしても、心配するには及ばない、半分は食べるものがある」。これは廬山会議以前のことで、つまり、毛沢東はとくに餓死者が出ていること、しかもひどい状況だったことを知っていたのだ。こうした資料は公開されたことがない」(2010 年 10 月 17 日『開放』金鐘によるフランク・ディケッターに対するインタビュー)。

1959 年の廬山会議は、もとは左傾に反対するはずだったが、彭徳懐の「万言書」に怒り、身の危険すら感じて、急遽、林彪を山上まで呼び立てて護衛に当たさせた。これ以後、「反右傾」（彭徳懐批判、三面紅旗への反対を批判）は火に油を注ぐ勢いとなり、大飢饉を蔓延させ、1962 年の劉少奇による「三自一包」の実行まで続いてしまった。しかし、その年、毛沢東はまたもや階級闘争を持ち出して、「党の基本路線」を提示し、しかも経済の好転につれて、それを以前より強く打ち出し、それが 1966 年 5 月 16 日の文革の幕開けで頂上へと登っていくことになる。

〔次号につづく〕

### 歳出し批評

## 雑説 朴鍾碩氏のこと (1975.1)

西順藏 解題・前田年昭

【解題】ここに紹介する西の短文は、目前の在日朝鮮人就職差別という現実社会における対立と闘争に対して、ただ「人間性」を切り口に考え判断する傾向を明確に批判している。階級社会においては階級的な人間性しかありえない。学問や文化は、何のため誰のために「用」いられるべきもの

かを文化大革命から学び、「実践上の立場が理論とか学問とかに先行する。立場を抜きにした、これを超越した理論・学問・文化はない」という立場に明確に立っているからみえてくることである。文革がまさに始まらんとしたときに書かれた「文化大革命は階級闘争である」(1966 年 8 月、

第 3 号で紹介) と併せ読むとき、1975 年の西の学問的立場が揺らぐことなく一貫していることがわかるだろう。現実社会で日々生起する対立のなかで自らの学問や文化を真摯に考察し続けた西には確固としてありながら、大半の日本の「中国研究者」に戦前から断絶することなく欠落し続けているのもまた、この立場である。文革時の暴力とファシズムの暴力とを同一視して疑わぬ、没階級的な“反暴力”論者は心して読むべきだろう。

毛沢東『文芸講話』「人間性論」という。人間性というものはあるだろうか。もちろんある。だが具体的な人間性があるだけで、抽象的な人間性はない。階級社会においては、階級性をもった人間性があるだけで、超階級的な人間性などというものはない。」

『朝鮮研究』という雑誌が刊行されている。もとは「学術」雑誌で、今はちがう。『研究』を称するからとて「学術」と限るわけではあるまい。研究者といっても「学者」などでないことがある。今はちがう、といったがどうちがうのか。例えば、その今年(一九七四年)の 7 号に「差別社会の中でいかに生きるか」という題目の崔勝久という人の文章が載っている。いま先ず、そのある部分の拙い紹介をする。この文章は在日大韓基督教青年会全国協議会の機関誌『灯台』一九号からの転載だ、と編集後記に記してある。

「朴君の訴訟を手がかりに」、これが副題である。在日朝鮮人三世の朴鐘碩君パクジョンソクが高校を卒業して日立の戸塚工場に受験し採用通知を受手したが、朴君が朝鮮人であることを知った会社は彼を〈解雇〉した。朴君はこれを民族差別による不当解雇とし、横浜地裁に提訴した。昨年のものである。この就職差別は結婚差別とならんで差別の基本的なものであり、人間にとって致命的であり、そして日本社会では民族差別と部落差別において徹底的である。一般に差別の網は、目にさだかではないが日本社会をおおっており、日本に生きる人間には、差別のハンゴの高さを争って「自由競争」している、といった面がある

ようである。いちおう道理にはあっているかのごとき「資格」も、なかなか決定的な差別基準なので、教育ママが子どもの「資格」に血眼になるのも、「資格」が就職・結婚に格差をつかるからである。わが「学術」界もけだし例外でない。この真理と自由の世界もやはり世間である。「権威」があり「権威」者がおり、その下にもろもろの差別がひろがっている。思うに、差別のない世界はなかなか現実とならぬだろうが、已むを得なければ、「資格」や「権威」を差別排除する、そういう差別世界であってほしい。

さて崔氏の議論はこうである。在日朝鮮人に対する就職差別は、日本人にとって、そして朝鮮人にとっても、それぞれに今更のことでない常識である。それを朴君が不当であると提訴した。まさにはじめてのことである。その意識は何か。それは在日朝鮮人の民族意識であるが、概してこれには三つの側面がある、と崔氏は指摘する。一つは言語・風俗・文化の「土」に根ざす素朴な民族意識。二つはイデオロギーをふくむ国民意識で、政治的に南北に分れているもの。三つが、被害者としての民族意識であって、これは日本社会で生きる就職・結婚・その他いさかいなどの日常生活の中で自覚させられる、社会的なもの。朴君が敢えてはじめて提訴した、その意識は、この第三のものである。

素朴な民族意識、その持主は主として一世の人である。これにもとづく日本在住感ニッポンカニは異和感であろう。第二の国民意識、これは日本ニッポンでよそ者あつかいされる前すでに自分からよそ者であることを主張する。在日朝鮮人として日本で差別されることに対抗する別の国民的主体性を主張している。

そして崔氏は言う。「在日同胞の七〇%以上を占める二世、三世は民族意識を(日本社会の実情をすでに日本の「土」の中で育てている(西)——二世は、半日本人と本国中心的に規定されるのではなく、まさには在日朝鮮人と主体的に規定されなくてはいけない。」そして崔氏は、これが自分たちの在り方なのだとする。自分たちの朝鮮人であるという自意識は〈被害者意識〉からはじまる。それは、就職・結婚の差別、そして「チョーセン」といった言葉などの横行する、この日本社会の中に生きる朝鮮人にとって「無理のないことである。それをきれいごとで

片付けてはならない！」

蛇足を加えたい。崔氏は、自分たちの朝鮮人としての民族意識が被害者意識に始まる、それは「無理のないことである」、と言う。これは崔氏の指摘のとおり、日本社会の民族差別による被害の実感が生んだ意識だという意味で「無理のないこと」なのである。ただの意識でなく、一回二回の事件によるのではなく、日本社会の中に生きる日常生活にかかわる意識なのである。彼らは、その生きることの全現実を、日本の差別社会の中に生きる朝鮮人という規定によって規定されているのである。だからこそ「きれいごとで片付けてはならない！」いや、片付けようにも片付け得ない。

「きれいごと」とは例えば、崔氏は、それは「本国意識」だとする。「本国がこれだけ発展したから、ということで自らの〈被害者意識〉を消散させてはならない。それでは〈被害者意識〉が全く個人的な意識に矮小化されてしまう。」また、民族差別に苦しんで焼身自殺した山村君の問題も、彼が帰化して日本国籍だったことできれいに「片付け」してしまうことになる。しかし、ことは社会の問題、日本社会の問題なのである。

では「ぼく達は、民族ということをやわずただの人間として生きるべきなのだろうか。」しかし、これもまた「きれいごと」にすぎない。「具体的現実の中では、人間というものは存在せず、すべて男か女、日本人か朝鮮人かアメリカ人……。そして〈被害者〉を生み出す社会は常に、女は男に仕えるものである、朝鮮の文化は日本より低い……。ぼく達は、そのような神話の下で貧困を生み出し、差別によって人間性を破壊するような日本社会の中では、ただの人間になることによって全体的な民族差別を黙認するのではなく、徹底して朝鮮人として生きなければならない。」

そこで在日朝鮮人は、その民族意識によって、「徹底して朝鮮人として」「日本社会に当然のこととして入っていく。」それは、ただの人間としての生きる要求から「入っていく」ことでない。朴君も言っているという。「もし自分がそのまま日立に入っていたならば、給料も社会的地位も高く、いわゆる幸福だったかも知れない。」もちろん日本社会の中に

閉鎖的な同胞社会をつくらせて生きることでなく、また海の向うに眼をむけ、現実から眼をそらして生きることではない。それでは差別を温存するのみである。民族差別を黙認せず被差別の朝鮮人として日本の差別社会に「入っていく」、これこそが、最も「人間らしく生き抜く」ことであり、ここにこそ「人格の重さ」があらわれる、と崔氏は考える。

ぼくがはじめに毛沢東の「人間性論」批判を記した、その意味もここにある。人間が人間性を主張し実現するためには、単なる人間性、自由、民主をもち出してはじまらぬ。崔氏の言うように「〈被害者意識としての民族意識〉——『文芸講話』なら、被抑圧者としての人民意識（西）——を持つぼく達が、日本人のように生きようということは、実は暗に、加害者の側にまわり、差別そのものを肯定することになるのである。」「ただの人間になって闘うということは問題の所在を曖昧にする。朝鮮人——中国人民（西）——として闘うのでなければ絶対にいけない。」「しまいにはこちらの人間性もが破壊されてくる。」だから、在日朝鮮人が朝鮮人として日本社会に「入っていく。」中国人民が人民として中国社会にそして世界社会に入っていく。「入っていく」のは闘いである。

中国のプロレタリア階級文化大革命はまことに文化大革命であって、今や、労農兵の人民の哲学学習が盛大であり、文芸上の革命大批判が盛大であり、そして大学教育などの教育改造が盛大である。これらの学問・文化の活動はすべて三大革命つまり階級闘争・生産闘争・科学の実践という具体的な実践の中で行われる。だからその学問とか理論とかは必ず「用」いられている。それは既成の理論たとえば毛沢東理論の単なる準用でなく、いわば「用」いられてそれはもう創造なのである。ところで、この理論とか文化とかを「用」い創造するところの実践は、帝国主義・修正主義に反対する実践である。まさにプロレタリア階級の立場からする文化大革命なのである。だから、実践上の立場が理論とか学問とかに先行する。立場を抜きにした、これを超越した理論・学問・文化はない。「人間性論」の場合と同じである。立場を抜きの学問・文化は立場を抜きの人間性と同

様に、現存の社会体制や世界体制を「黙認」し温存するのみである。そこに「幸福」があるかも知れない。しかしそのとき「人間性もが破壊されてくる」。

ただの人間として、「人間性」をもって世界に「入っていく」とき、そこに「幸福」な世界がある。同様に、抽象的な学問・文化をもってしても「幸福」な世界を見出しうるだろう。それは「権威」と「資格」の支配する差別世界にぶらさがることである。だがしかし、「権威」「資格」は、それにぶらさがることの許されない人間がいることによってこそ「権威」であり「資格」なのである。だから「権威」「資格」の既成の「幸福」世界は、その本質において、これにぶらさがることの許されない人間を、己れの外にもち、これに背反されている。そしてこの、外に在り、背反する人間は、外に在り、背反するものの「当然のこととして」、この「権威」「資格」世界に「入っていく」。

そのとき、中国社会はようになったか。そして世界社会はどうなりつつあるか。そしてまた日本社会は

どうなるのか。差別された在日朝鮮人が、差別されたものの「当然のこととして」、日本社会の中に「入っていく」、そのとき民族差別をその本質とする日本社会はどうなるのだろうか。部落差別の場合も同じ問題がある。そして、このような差別を基底にもって差別の網におおわれた日本社会の中で普通に生活している私が、人間性だの学問・文化だのをくりひろげたとき、それがいかに批判的とか科学的とかであっても、もう「当然のこととして」、その権利が、立場として仮構であり、いや、欺瞞である、と問われているように思われてならない。

【後記】朴鍾碩氏の〈解雇〉不当の提訴は、その後、受け入れられ、氏は原名のまままで日立に〈復帰〉した。

〔出典：『日本と朝鮮の間 京城生活の断片、その他』影書房、1983、pp.130-135、初出：『岩波講座 世界歴史』月報 30、1975 年 1 月〕

## 胡傑監督『私が死んでも』字幕（その 3）

土屋昌明 編訳

〔前号からのつづき〕

63



（红色恐怖万岁）

（赤色テロ万歳）

（吴三冬，原北京 2 中学生）

（呉三冬、もと北京二中の学生）

吴三冬：北京六中干部子弟非常多嘛，打死人最多的就是他们学校了。这帮家伙是最厉害的，没听说那个平民子弟足额小闹得这么厉害。

吴三冬：北京六中は幹部の子弟が多いだろ、被害者が最も多いのは六中だ。連中は本当にひどい。平民の子弟でこんなひどく騒ぐのはあり得ない。

64

（徐霈田 被红卫兵打死的六中校工）

（徐霈田、紅衛兵に殺された 6 中の職員）

潘士弘：我姨给我讲，她就看收尸车来了，扔上去一个女的，穿的是黑丝袜，腿还在抖。

潘士弘：うちのおばの話では、死体収容車が来て女を一人連れて行った。黒い靴下で足がまだ震えていたと。

## 65



(六中の审讯室)

(6 中の尋問室)

王晶焄：首先在西城区蔓延，一个是女三中，女三中的书记校长叫沙平，沙平。这还有一个是…。

胡杰：就被打死的，是吗？

王晶焄：唉，当然打死的。那也很惨，很惨。这个这个，甚而死的有更惨，喝痰盂的水啊，就污辱啊。

王晶焄：(紅衛兵の暴行は) まず西城区で広がった。一人は第三女子中学高校の書記で校長だった沙平だ。それからもう一人は……

胡傑：殴り殺された？

王晶焄：もちろんそうだ。あれも悲惨だった。もっとひどい殺され方をしたのは、痰壺の水を飲まされたんだ、侮辱するために。

## 66



(汪壁 北京外国语学校党支部书记)

(汪壁 北京外国語学校の党支部書記)

汪壁：我决不能自杀，因为自杀是叛党啊。自杀也要给你扣个帽子，所以我想我不能戴个叛党帽子。将来给孩子带来灾难，我才不走这条路呢。打死我是你的事，我决不能自杀。我当时的思想就是这样的。

汪壁：絶対に自殺するわけにはいかない、自殺は党に背くことだから。自殺しても帽子をかぶせられるから、党裏切りの帽子をかぶるわけにはいかない、このさき息子に災難となるから。だから自殺の方には行かなかったんだ。殺されるかは相手次第だが、絶対に自殺するわけにはいかない。そう当時は考えていた。

## 67

王晶焄：再有一个就是八中校长是华锦，华锦呢，是

这样，挂在暖气上的。

王晶焄：もう一人は第八中学高校の校長で華錦だ。彼女は、こうだった、スチームの上につるされたんだ。

## 68



資料片：北京師大女附中の紅衛兵宋彬彬給毛主席戴上了紅衛兵の袖章，毛主席问她：叫什么名字，她说：叫宋彬彬，毛主席问：是不是文质彬彬的彬，她说：是，毛主席说：要武嘛。

資料映像：北京師範大学附属女子中学高校の紅衛兵宋彬彬は、毛主席に紅衛兵の腕章をつけて差し上げた。毛主席は彼女に名前をたずね、彼女が「宋彬彬です」と答えると、毛主席は「文質彬彬(上品で礼儀正しい)の彬か」とたずねた。彼女がそうだと答えると、毛主席は「武が必要だな」とおっしゃった。

## 69



林莽：而且这个死啊，从师大女附中一死死到全国去了。几百万人的死都是大同小异，都是像卞仲耘这样。这开始就给全国人民一个例子，唆使年青人去打人，打死人。是从这里开始的。

林莽：しかもこの死は、師範大学附属女子中学高校から全国に広がっていったんだ。何百万人もの死は、どれも似たり寄ったりで、みんな卞仲耘と同じだ。これが全国の人々にとっての先例となり、若者に人を殴ることを、殺すことをそそのかした。それはここから始まったんだ。

## 70



胡杰：那一个月在北京，具体打死了有多少人有记载吗？

王晶焄：有啊，一千七百七十几数字，八月份。

胡杰：就这一个月就打死了一千七百多人？

王晶焄：嗯。

胡杰：ひと月の間に北京でどれくらい殺されたのか、記録はあるのだろうか？

王晶焄：あるさ。1770 数名だ、八月で。

胡杰：たったひと月で 1700 人あまりも殺されたんですか？

王晶焄：ああ、そうだ。

## 71

潘士弘：我的一个同学是所谓资本家，他是被弄到男 8 中，一共七个人跪在那里打了一宿，当场死了三个还是两个。他算活下来了。那时什么刑法都用上了，因为共产党宣传日本的老虎凳，灌水，灌胡椒面，反正这些红卫兵都使上了。那时候就是血统论，谭力夫，谭力夫现在是故宫博物院党支部书记是什么，他就是提出这个口号，老子英雄儿好汉，老子反动儿混蛋，就是他嘛。

潘士弘：私の同級生の一人は資本家だったので 8 中に連れて行かれ、全部で 7 人がひざまずかされて一晩中殴られ、2 人か 3 人がその場で死んだ。彼は生き残った方に入った。その時、色々な刑罰が使われた。共産党は日本の拷問法を宣伝したから（みんなやり方を知っていたんだ）、水攻めとかコショウを顔面にふりかけるとか…とにかくそんな拷問を紅衛兵は全部使った。当時、血統論というのがあった。譚力夫が…彼は今は故宫博物院の党支部総書記か何かだろ、こういうスローガンを出した。「親が英雄なら子供もよし、親が反動なら子供も駄目」、譚力夫が言ったんだ。

## 72



林莽

当時の状況をどう考えていましたか？

胡杰：你这么有才华，对当时的现象你是怎么想的？  
林莽：哎呀，我最愚蠢呀，所以说起来你都不可能相信。我的悲哀就在这里。我还非常的兢兢业业地干，而且干得很出色。这个师大女附中的前身是女子师范大学。她们接受了一大批最珍贵的古典文集。而这个古典文集就扔在地上，没人管的。唉呀，我一看不得了，康

熙年间的，手一碰就破的。还有一个二十四史，还有诗类丛书，经、史、子、集我都全把它整理装订放玻璃柜。这些东西现在是无价之宝。我为什么还会这样呢？我脑子里还真是觉得应该改造呢，你可不可理解呢。那个对党的崇拜的心理啊，觉得自己确实小资产阶级思想太厉害了，我还必需改造。我必须通过工作……

胡傑：見識のあるあなたは、当時の状況についてどう考えていましたか？

林莽：ああ、私はおろかだ、だから話したとしても、信じてもらえないだろう。私の悲しみもまさにここにある。私はこつこつと仕事をした。しかも素晴らしい出来だった。この師範大学付属学校の前身は女子師範大学だ。大量の貴重な古典文集を受け入れていた。その古典が地面に投げ捨てられて誰も顧みなかった。私は見るに堪えなかった。康熙年間のもので、手で触れるだけで破れてしまう。それに二十四史もあった。詩などの叢書も。経史子集すべて私が整理して装丁しガラス戸の書棚に入れたんだ。これらは現在では非常に貴重な財産だ。どうして私はそうできたのか？ 頭では自分を改造しなければと思っていたんだ、理解できるかね？ 党に対する崇拜の気持ちだ。自分は本当にプチブル思想がひとく、改造しなければと思っていた。自分の仕事を通して…

## 73



孔子のように道民を侮辱してはいない

广播电台播音员（原始资料）：无产阶级文化大革命只能是群众自己解放自己，不能采用任何包办代替的办法，要信任群众，依靠群众、尊重群众的首创精神，要去掉怕字，不要怕出乱子。毛主席经常告诉我们，革命不能那样雅致，那样文质彬彬、那样温良恭俭让。要让群众在这个大革命中自己教育自己。

ラジオ局アナウンサー（原資料）：プロレタリア文化大革命では、大衆が自分で自分を解放するしかなく、いかなる代行的なやり方を採ってはならない。大衆を信頼し、大衆に依拠し、大衆の創造的な精神を尊重しなければならない。恐れという字を取り去らなければならない、騒ぎが起こるのを恐れてはなら

ない。毛主席が常々我々に教えているように、革命はそんなにお上品で、そんなにみやびやかな、例のごとく文質彬彬（『論語』雍也）で、例のごとく温良恭儉讓（『論語』学而）ではない。この大革命の中で、大衆に自分で自分を教育させるようにしなければならない。

## 74



王晶焄：焚尸炉烟筒里面飘出的一股烟哪，我也把它拍下来了。就这样的一个人呢，就最后，冤魂就化作一股青烟。

王晶焄：火葬場の煙突から煙が上がったので、それも写真に撮っておいた。こうして彼女という一人の人間、最後に、無実の魂は、一筋の煙になってしまったのだ。

## 75



林莽：我和母亲两个人，我就跟我妈讲，我说：没有活的意思啦。当时我听到邻居有一个自杀的办法，怎么自杀呢？他也是母子两个，就是有个铁丝，把这个手绑着，这个手绑着，然后就放到电线一接，把电门的开关一啦，就同归于尽。我妈就讲：儿啊，我跟你一起走吧。我就这样子写了一张很简单的大字报。我十四岁就参加革命，今天你还说我是特务，我现在以死来表白，我说毛主席是不可能知道的，我希望你们大家右左邻居们能理解我这么一个人。回去以后我把铁丝给我妈一绑，给我自己一绑，我们两个人同坐在一张木板床上，这个木板床偏偏又太高，结果我把

电灯泡按上了，把铁丝也拧紧了。然后我去拉线开关，一拉线一拉呀，叭！就灯泡炸掉了，没有死成。

胡：灯泡炸了？

林莽：灯泡炸了。主要的原因后来问了物理老师，因为你们两个没有一个接到地面，如果有一个人接触到地面呢，就死了。电就通过去了，绝缘了。该死没死成嘛，那时候死掉的，该死的再起来，他没死成。……当时死的时候非常是平静，觉得解脱了。

林莽：私は母と二人暮らしだった。私は母に「もう生きている意味がなくなった」と言った。当時近所の人にある自殺の方法を聞いた。どうやるかというのと、彼も母親と二人だったが、針金を用意して、この手に結びつけ、こちらも結びつけ、それを電線につないで、電気スイッチを入れれば一緒に死ぬるという。母親は「息子よ、一緒に死のう」と言った。そこで私は簡単な大字報を書いた。「私は 14 歳で革命に参加したが、今ではスパイだと言われている。私はここに死んで身の潔白を証明する。毛主席は分かるはずはないが、近所のみなさんは私がこういう人間であったと理解できることを望む」。家に帰って、針金を母親につなぎ、自分にもつないで、二人で木のベッドに座った。この木のベッドはちょっと高さがあったが、電球をソケットに入れ、針金もねじ込めた。そしてスイッチの紐を引っ張った。ちょっと引っ張ると「パン」と音がして電球が破裂した……死ねなかった。

胡：電球が破裂した？

林莽：そうだ。主たる理由は、あとで物理の先生に聞いたら、「あなた方二人とも床に触れていなかったからだ、もし一人でも床に触れていたら死んでいた。電気は通っても、絶縁状態になっていた」と言うんだ。死にたかったのに死ねなかった。死に損ないだ。死ねなかった。その時、死のうとした時は、とても静かな、解脱した気分だった。〔次号につづく〕

## お知らせ！

『中国 60 年代と世界』合冊本（自 2015 年 3 月 至 2018 年 8 月）B5 判並製 352 頁、出来ました

本会会誌第 1・2 期通しの合冊本（第 2 期第 10 号まで）を作りました。会員には 1 冊 1 口 1500 円のカンパをお願いしたく存じます。郵送の場合は、着払いなどでお送りさせていただき、カンパは銀行振り込みでお願いいたします。郵送希望の方は幹事にご相談ください。なお、編集部から非会員の希望者に譲渡する場合は 1 冊 2000 円のカンパをいただき、印刷代にあてたいと思います（ただし部数は僅少です）。